

研究発表 2

アクティビティ・リハビリ・レクリエーション

業務改善・ICT・介護ロボット等

LIFE 導入の取組等

その他（施設系）

2-1

演題	業務効率を上げ利用者の QOL 向上に繋げる
副題	～ iPad を活用し利用者との時間を増やす～

法人名	社会福祉法人 ユーアイ二十一
施設名	太陽の家二番館

発表者名 (職種)	須田 ゆかり 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者	宮崎 涼太	住所	横須賀市西浦賀 6-1-2
共同発表者		TEL	046-841-2088
共同発表者		FAX	046-841-2083
共同発表者		メールアドレス	jinzai_ikusei@ui21.or.jp
共同発表者		URL	https://www.ui21.or.jp

今回の発表施設 またはサービスの 概要	社会法人太陽の家二番館ショートステイ（10床）完全個室。 食事を利用者様の目の前で盛り付け家庭的な雰囲気です。温かい食事を提供。 山の上であり海を見渡せる景色の綺麗な施設。
---------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

ICT (iPad、荷物チェックアプリ) を導入することにより、業務効率を上げ利用者に関わる時間を増やす。

取り組んだ課題

- ・ ショートステイの業務に入退所時の荷物チェックがあるが、手書きの所持品チェック表で管理している為、ご家族が記入してきた荷物と、持参してきた荷物の照らし合わせに時間がかかる。チェック漏れなどによる忘れ物もなくなる状況がある。
- ・ 忘れ物を減らす。
- ・ 業務効率を上げ利用者様と過ごす時間を増やしたい。
- ・ 施設では iPad を導入したが、一部の職員は操作方法が分からないと敬遠している。

具体的な取り組み

- ・ iPad の操作方法をマンツーマンで指導。
- ・ 荷物チェックアプリの無料版を 2 か月試しに行ってみる。
- ・ 所持品チェック表の見直し。
- ・ 荷物を写真で管理するにあたってご利用者様の家族に同意を頂く。
- ・ YouTube を利用しレク時間を有意義に。

活動の成果と評価

- ・ 荷物を写真で撮ることになり、一人当たりのチェック時間が 3 ～ 10 分短縮できた。
- ・ 写真で荷物を確認出来る様になり、柄や色、形などすぐわかる。
- ・ ご家族より記入する項目が少なくなり、億劫だった荷物チェックが楽になったと意見を頂戴した。
- ・ ゆとりが出来利用者様と向き合うレク時間が増えた。

今後の課題

写真の撮り忘れ、退所直前に入れようと思っていたもの、杖、コート、歩行器等持たせ忘れがあるため

改善していく。

参考資料など

介護サブリ 荷物チェックアプリ

2-2

演題	介護ロボットの導入にあたって
副題	～見守りセンサーの導入事例～

介護 ICT 化
見守りセンサー

法人名	社会福祉法人 愛成会
施設名	特別養護老人ホーム愛成苑

発表者名 (職種)	山崎 有香 介護職員
共同発表者	木村 正和
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市瀬谷区瀬谷町 4131-16
TEL	045-300-0881
FAX	045-300-0883
メールアドレス	kinou_pc@aiseienn.jp
URL	http://www.aiseienn.jp/aiseien02/TOP/top.html

今回の発表施設 またはサービスの 概要	平成 21 年 9 月 1 日開所のユニット型特別養護老人ホーム。定員 100 名(うち短期入所 10 名)。平均要介護度は 4.0。「愛生相和」の理念のもと、家の離れの一部屋のように自由に伸び伸びと暮らしていただけるよう、サービスに努めています。
---------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

愛成苑が介護を変えるという信念のもと、日々新しい取り組みを行っている。その一つとしての介護ロボット導入。利用者・職員双方にメリットのある活用方法を検討・検証を続けている。

取り組んだ課題

見守りセンサーに関しては、職員への巡回回数軽減などの業務改善だけでなく、利用者の眠りの質の確保にもつながる取組。利用者の行動を把握することで、より質の高いサービスを提供することに注力した。

具体的な取り組み

起き上がりや離床のタイミングなどを知ることで、利用者の生活リズムを解析したり、医療への情報提供などにも役立てることができた。また、転倒事故の多い利用者などの行動開始を把握することで、転倒防止などにも役立てている。

活動の成果と評価

導入後の職員へのアンケート調査などからも、その効果は実証されている。また、居室内での事故も減少している。

今後の課題

- ・ 導入コスト、維持コストの問題。
- ・ 見守りセンサーが過敏に反応することもあり、その察知段階や数値に苦慮する場面がある。
- ・ センサー感知が重なった場合など、どちらを優先すべきなのか？結果的に事故などなかったとしても、職員の心に新たなジレンマが発生している。

2-3

演題	概念を崩して業務効率を上げる
副題	～業務改善委員会の取り組みを紹介します～

業務改善
作業効率向上

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	わかたけ鶴見

発表者名 (職種)	松浦 望美 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者		住所	横浜市鶴見区矢向 1-4-20
共同発表者		TEL	045-642-0075
共同発表者		FAX	045-583-6616
共同発表者		メールアドレス	wakataketsurumi@wakatake.or.jp
共同発表者		URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市鶴見区に 2013 年に開所した介護老人福祉施設です（定員は 100 名、ショートステイ 20 名のユニット型施設）。 「職員一丸となって人を幸せにします」「人が大切にされる世の中を創ります」という法人理念のもと、日々の介護に努めています。
---------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

今後ますます超高齢化社会が加速していく中、少ない人員でも効率的に業務を行いご利用者様の生活が安心、安全に行われるように日々の業務や仕組みを見直してきた内容を発表致します。

取り組んだ課題

従来の人員配置で行っていたユニットケアの業務内容を少ない人員配置で継続するには職員個々への業務負荷が高くなっている現状があり、以下の二点に着目し業務改善を行った。

- ① 夜勤職員の朝の業務負担（一人で離床対応、排泄介助、朝食準備）と多岐にわたる。
- ② 各居室トイレから、排泄物品がある倉庫までの移動距離が長く負担になっている。

具体的な取り組み

- ① 食事を委託している業者と相談し厨房で可能な事とフロアで可能な事を相談、すり合わせを行う。ハード面やコスト面様々な観点から実現可能な事を模索し朝食の配膳方法の変更に至る。
- ② 排泄ケアに掛かるムダの削減。
パット倉庫から物品を持ち出しやすくする為の 5S を行う。必要物品を選定し各居室にパット類を入れる箱を設置、衛生面に考慮しながら設置した。

活動の成果と評価

- ① 朝食を食器ではなく弁当箱での配膳に変更。
配膳時間の削減に繋がり、職員の負担軽減になった。主菜、温菜、冷菜が一つの箱に入っているので誤配膳の抑止。お弁当箱になりゴミが削減。
- ② 各居室に排泄物品をセットすることで倉庫まで取りに行く手間がなくなった。
単純に移動距離がなくなり負担軽減。ご利用者様を待たせる事がなくなり転倒、転落を抑止出来る。職員のストレス軽減につながり利用者様へ向き合う時間が増える。

今後の課題

- ・現在の弁当箱も数年後に廃盤になる可能性もあるので維持、管理しながら新たな弁当箱の購入も視野に入れておく。
- ・業務改善、効率向上は今後も課題となる事であり引き続き作業導線の見直しや現状では、当たり前と思っていることを見直し改善策を考える。

2-4

演題	Aams の導入 失敗と混乱からの学び
副題	～ ICT の活用でどこまで改善を行えるか?～

法人名	社会福祉法人 ユーアイ二十一
施設名	太陽の家座間

発表者名 (職種)	森 祐介 介護職員
共同発表者	藤田 智之
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	座間市座間 2-861-1
TEL	046-298-5133
FAX	046-298-5132
メールアドレス	jinzai_ikusei@ui21.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	太陽の家座間は 2015 年 10 月座間市に開設した入所 100 名短期入所 20 名のユニット型特別 養護老人ホームで、居宅介護支援事業所と職員のお子さんを預かるための保育室を構えている。 最寄駅は JR 相模線「入谷駅」と小田急小田原線「座間駅」2 駅可能
---------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

新しい機器を導入すると、少なからず混乱や不満などが上がる。それらの問題点を抽出し、より職員が安心して使用できるよう改善を行うのと併せて、今後新たに導入する施設での参考になればと思い実施。

取り組んだ課題

aams とは、株式会社バイオシルバー様より販売されている、ベッドマットレスの下に設置するタイプの見守り介護ロボットで、a_安心・a_安全・m_見守り・s_システム、略して aams(アアムス)。
aams は、センサーマットをマットレス下の適切な位置に設置することで、感知される心拍・呼吸・体動・離床がサーバーを通してモニターに表示される。深い眠り・浅い眠り・覚醒の情報もリアルタイムで確認できる。
見守りカメラも併用でき、起き上がり時や離床した際に iPad やパソコンで live 映像を確認できる。
aams 導入により入居者様と職員にとって何が変わったかを検証。

具体的な取り組み

導入してからの不満点・混乱点・改善点等についてアンケートを実施。

【良かったと思える点】

- ・ ベッド上での起き上がりに気付ける
- ・ 看取りの方の状態変化に気付きやすい
- ・ 入眠状況を把握できるため利用者様の安全確保や職員の負担が軽減された

【改善して欲しい点】

- ・ 感度設定等の問題でセンサーが頻繁に鳴ってしまう

活動の成果と評価

事例① ・ A 様 (ご逝去された方)

1 ヶ月ほど前から状態の低下が顕著となり、看取りケアとなっていた。

夜間帯で離床コールが鳴り、駆けつけると呼吸が止まり始めていた。

ご家族へ電話連絡、到着時に呼吸は停止していたが、

まだ体感の温かいご本人様に会っていただくことができた。

【事例振り返り】 すぐにご家族へ連絡ができたことはもちろんあるが、場合によっては医師や看護師、家族などに心拍などのグラフを基にいつ呼吸が止まったかなど根拠を持った証明として提示できる「安心」もそこにある。

事例② ・ B 様 (夜間帯に転倒され骨折された方)
夜間は独歩され、自身で排泄・臥床等行っていた。
朝、起床介助の為職員が訪室。介助するが端座位から臀部すら上がらない。
看護師とともにボディチェックするが、左膝に皮膚剥離がある程度で痛み等訴えなし。その後も立位困難な状態が続き、さらに痛みも出てきた為緊急受診し、左大腿骨頸部骨折の診断で入院となった。
事故検討時 aams のグラフを確認すると、普段休まれている 22:30 過ぎから不自然な覚醒が多くみられ、転倒の時間帯が推測することができた。

【事例振り返り】 夜勤中データを見て、普段との違いがある際には訪室し、事故・急変の早期発見へ繋げるという対応の変更へと繋げることができた。

今後の課題

aams は細かなバイタルサインの変化が目に見える情報としてあるので、根拠を持ったケアを行うためには介護に切っても切り離せないものとなりつつある。特に看取り期は精神面の負担軽減が顕著で、職員から「aams があって良かった」という声が多く聞かれる。

令和 3 年 4 月 1 日の介護報酬改定で、見守り機器等を導入した場合における人員配置基準の緩和の中で、テクノロジーを有効活用して、いかに入居者様に質の高い生活支援をしていくのかを考えていく必要がある。

2-5

演題	みんな 顔が見たい
副題	

面会
ICT 活用

法人名	社会福祉法人 湘南愛心会
施設名	特別養護老人ホーム 逗子杜の郷

発表者名 (職種)	野間 智子 介護職員
共同発表者	松林 正浩
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	逗子市沼間 1-23-1
TEL	046-870-6800
FAX	046-870-6805
メールアドレス	morinosato-kaigo@tokushukai.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	2014年5月に逗子市に特養として開設致しました。JR横須賀線東逗子駅より徒歩7分の緑の杜に囲まれた立地に位置し「地域に必要とされ愛される施設づくり」を目指して、ご入居者様に寄りそう介護を提供する施設運営をしています。
---------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

職員、ご入居者様と「コロナとどう共存していくのか?!」制限ばかりのマイナス面だけではなく「今できることをやろう!そしてみんな笑顔で過ごそう」をキャッチコピーにしてコロナ禍をつらくもありませんでも楽しみを持って乗り越えた結果を報告する。

取り組んだ課題

新型コロナウイルス対策といった中で突然、生活の変化が必要になってしまった。それに伴い面会・外出できないなどの制限により、楽しみが大幅に減少してしまっただけでなく「コロナ前みたいにも楽しみたい」といった思いが強くなった。多職種協議を繰り返し「今できることをやろう!そしてみんな笑顔で過ごそう!」をキャッチコピーとした。そんな思いの中から「家族に逢いたい!」「食事や行事など一緒に楽しみたい!」といった2つのコンセプトでアプローチを開始した。ここでは「家族に逢いたい!」を目的とした内容の結果を報告する。

具体的な取り組み

- ① 面会の検討
どうにかお互いに顔が見える環境を作りたい…
 - ・方法:対面 窓越し オンライン
 - ・ルール:日時 時間枠 予約制
- ② 面会以外の施設からの発信
 - ・状況報告の手紙、新聞
 - ・行事写真の共有
 - ・ブログ
- ③ 家族からの要望
 - ・差入れ
 - ・家族からの動画や写真

活動の成果と評価

利用者・家族からの評価
・コロナ禍で、どうにか逢える、顔が見える方法については、概ね良好であった!
例)施設として気にしすぎであったのでは…
もっと家族の立場になってほしかった…

職員の变化

- ・家族面会立ち合いなどを通じて、日々の生活への視点

副産物

- ・オンラインでの活用していたタブレットが介護記録の電子化に転用
- ・ブログが求人活動の1つになった

今後の課題

- ・この顔が見える環境を持続できるよう感染対策や職員の意識が高く保てるような取り組みの立案・実施していきたい
- ・看取りの方への「24時間365日いつでも面会」を目指す

2-6

演題	オムツの在庫管理に携わってきて
副題	～業務改善と職員のモチベーションアップ～

コスト意識
排泄最適化

法人名	社会福祉法人 慶寿会
施設名	特別養護老人ホーム カトレアホーム

発表者名 (職種)	細川 清人 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者	杉崎 希	住所	茅ヶ崎市下寺尾 1835-2
共同発表者		TEL	0467-52-8711
共同発表者		FAX	0467-52-8712
共同発表者		メールアドレス	kattleya_home@chigasaki.jp
共同発表者		URL	https://www.chigasaki-keijukai.com/katorea

今回の発表施設 またはサービスの 概要	カトレアホームは昭和54年に開設された定員50名(短期入所2名)の従来型特別養護老人ホームです。全室多床室の中で医療ニーズの高い利用者、認知症利用者を幅広く受け入れ、個別ケアの実践を行っている施設です。
---------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

特養においてオムツ代は介護報酬に含まれている。そのためコスト(在庫)管理、意識が大切である。在庫管理で数字を追っていると、その数字から介護現場での排泄支援の悩みや課題が見えてくる。数字の分析を通じて見えた「排泄支援の質」向上の取組を報告する。

取り組んだ課題

排泄支援におけるQOLの向上を目指す取り組みとして「脱オムツ」がある一方、オムツ着用を必要とする利用者も存在するが、ここに着目する研究は意外と少ないと感じる。オムツ着用の理由は「排泄頻度・量の不確実性」にあると考えられ、「定時交換」を主体とした支援になっていると考えられる。施設、利用者双方にとっての利を考えると、使用方法の徹底やアイテムの絞り込み、そして何より排泄アセスメントを通じた「随時交換」への意識付けが必要だということに気が付いた。

具体的な取り組み

※オムツ業者に協力を依頼、(アイテム毎に)オムツ使用量をデータ化した。

- 1、コストの大きいアウトタータイプの使用量が多い
→当て方の技術が未成熟。業者による勉強会の実施。
- 2、適切なパットが選択されていない
→使用方法のルールに統一感がない。
職員のアイテム選別能力に個人差がある。
- 3、「大は小を兼ねる」の常識が非常識?
→夜間帯用の高吸収パットも使用方法が正しくなければ効果を発揮しない。

こうした課題に対応するため、職員にアンケートを実施、排泄支援について深く考えていただく機会を持つこと(意識改革)を図った。

活動の成果と評価

「排泄支援におけるQOL向上」とは何かを施設全体で考える良い機会になったと考える。

オムツ着用というイメージがQOLと結びつきづらいが、これを生活に不可欠なものとして使用している人にとって、より快適で、プライバシーが守られ、尊厳が守られる形で活用していけることが大切なのではないか？

私たち職員はそのために、使用方法や技術向上を考えていく、そのことがQOL向上への働きかけと言えるのではないかと？

今後の課題

今回の発表を通じて「排泄支援の質」の向上を考えていくと、在庫管理面だけでなく、支援全体に目を向けて行く必要があると感じた。その取り組みとして「随時交換」へのシフトは一つの手段として有効だとは認識しつつも、現場の現状から改善や理解を深めるにはまだ課題も多く残されている。この先も利用者へのサービス提供の質と現場の課題をすり合わせてこの活動を継続して行こうと考える。

2-7

演題	あなたと向き合うための ICT
副題	～ともに過ごせる尊い時間～

ICT
業務改善

法人名	社会福祉法人 奉優会
施設名	特別養護老人ホームかわいの家

発表者名 (職種)	照川 仁志 相談員	都道府県	神奈川県
共同発表者	長瀬 敬子	住所	横浜市旭区川井宿町 69-1
共同発表者		TEL	045-954-4500
共同発表者		FAX	045-954-4499
共同発表者		メールアドレス	kawainoie@foryou.or.jp
共同発表者		URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市旭区に平成 22 年 4 月開所のユニット型施設（本入居 90 名、SS 10 名）。 ユニットケアの手法を活用し、多職種で連携をとりながら、一人一人の尊厳を大切に して個別ケア、あたりまえの生活を実現するべく取り組んでいます。
---------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

介護業界の人材不足とうたわれ続けて、現場では業務に追われ、ご入居者と接する機会が減ってきてしまっている。そんな中、ICT を導入し、いかに作業効率を上げ、ご入居者と関われる時間を見出せないかという目的で取り組んでみました。

取り組んだ課題

現在の業務で負担となってしまうことを見直し、作業効率を上げる方法とそれを周知し施設全体で活用をするためにどのようにしたらいいのか。ICT を頼るところと人間が直接関わることを意識し、ご入居者の尊厳を守りながら個別ケア、自立支援に努めています。

具体的な取り組み

1. ケース記録の効率化
 - (1) タブレット端末の使い方を周知
 - (2) タブレット端末を活用し 1 ケア 1 入力
 - (3) いかに簡単に、確実に記録をするか
 - (4) ケース記録による残業時間を削減
2. 現状をより具体的に把握するために
 - (1) 伴走支援の導入
 - (2) 職員の行動分析
3. ICT 機器導入で得られた実績
 - (1) A 様の起床時間の見直し
 - (2) B 様の睡眠状況と介入の見直し

活動の成果と評価

1. ケース記録にタブレット端末の使用率
iPad 10% → 85%
iPod touch 5% → 74% に上昇
2. ケース記録による残業時間
効率化を試みた結果、記録による残業が半減した
3. 職員の行動分析結果
やるべきことをしっかりできていることがわかった反面、思わぬところで手がかかっていることもわかった。

今後の課題

- ・ 分析した職員の動きに対し、今後どのような ICT 機器を導入することでさらなる効率化を目指すか。
- ・ ICT を活用しての尊厳の保持、個別ケアの強化、いかにして QOL を向上させるか。

参考資料など

- ・ 総務省統計局「高齢者の人口」
- ・ 厚生労働省「介護サービス事業(施設サービス部)における生産性向上ガイドライン」

2-8

演題	LIFE 導入後の効果と課題について
副題	

LIFE
課題

法人名	社会福祉法人 湘南福祉協会
施設名	特別養護老人ホーム 湘南ホーム

発表者名 (職種)	杉 輝夫 その他
共同発表者	谷本 茜
共同発表者	藤崎 直子
共同発表者	五木田 剛
共同発表者	石井 恵一朗

都道府県	神奈川県
住所	横須賀市太田和5丁目500番地
TEL	046-856-3220
FAX	046-856-9442
メールアドレス	shonan-home@net.email.ne.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	当施設は、1987年、横須賀市に開設した。特別養護老人ホーム、ショートステイ、通所介護、居宅介護支援センターを運営している。通所介護は定員25名の通常規模型で、8時間のサービスを提供している。2022年7月からLIFEのデータ提出を開始した。
---------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PRポイント

- 目的
 - 科学的介護情報システム(LIFE)に提出している自施設のデータとフィードバック票のデータを比較し自施設の利用者の概要を客観的に把握するとともに、サービス方針を決定することとした。
 - LIFEから得られるデータを活用し、科学的介護の取組を検証することとした。
- PRポイント
 - LIFEを活用して科学的介護の取組について検証した。

取り組んだ課題

LIFEに毎月返却される暫定のフィードバック票(暫定版)には、全国の数字が表示されているだけで活用が困難であった。そのため施設内で運動機能、認知機能等の計測を行い、問題点の把握、サービスプログラムの立案を行った。事業所フィードバック票(事業所版)の公表後は、全国の利用者の変化等を確認できるようになった。しかし暫定版と事業所版では、データ数もデータの内容にも違いがあり、それぞれの活用方法は異なると考えられた。

具体的な取り組み

- 研究Ⅰ
提出したデータと暫定版を比較し、LIFEの利用状況について確認した。また年齢、バーセルインデックスの点数(BI score)、要介護度について全国と比較し、自施設の対象者の概要を客観的に捉え、サービス方針を決定した。
- 研究Ⅱ
LIFEから得られる情報だけでは具体的なサービスプログラムを立案することが困難であった。そのため別途行っていた計測より、問題点の把握、プログラムの立案を行った。BI score、要介護度、障害高齢者の日常生活自立度、認知症高齢者の日常生活自立度、認知症行動障害尺度の変化を、開始時(pre)と8か月経過後(post)とで統計学的に検証した。

活動の成果と評価

- 研究Ⅰ
 - 成果：提出できていたデータは利用者情報、科学

的介護推進情報のみであった。既往歴情報に記載されていた利用者は35%のみであった。その要因として、スタッフからは情報収集が困難、下位分類ができなかった等が挙げられた。自施設の利用者は90歳以上の割合が高く、BI scoreが高値で介護レベルの低い利用者が多かった。そのため、サービス方針は動作能力の維持と重度化の予防とした。

- 評価：自施設で入手できる情報だけでは、十分なデータ提出が困難なことが判明した。医療サイドからの情報が不十分、LIFEから求められているデータの質と得られる情報の質のギャップが大きいことが原因と考えられた。全国とのデータの比較することで、根拠を持ってサービス方針を決定することができた。

○研究Ⅱ

- 成果：preにおける運動機能等の計測より、利用者のほとんどで身体的プレフレイル、サルコペニア疑いを認めた。そこで、筋力増強トレーニングを中心としたプログラムを導入した。preとpostの両方で運動機能等を計測できた15名を対象にBI score、要介護度等の変化を統計学的に検証したところ、すべての項目で有意差を認めなかった。
- 評価：8か月後の利用者の動作能力、介護度は維持されていた。PDCAサイクルのPlanを充実させるためには、LIFEを利用するだけでは不十分と考えられた。一方で事業者版には、効果判定の指標や基準といった有益な情報が含まれていた。CheckとAssessmentの部分においては、LIFEを活用することが科学的介護の推進につながると考えられた。

今後の課題

施設レベルのサービス方針の決定と効果判定に対する一手法を提示している。個人レベルへの対応について、別途検討が必要である。

参考資料など

- 厚生労働省、ケアの質の向上に向けた科学的介護情報システム(LIFE)利活用の手引き、2022
- Chen LK, Woo J, et al. Asian Working Group for Sarcopenia: 2019 Consensus Update on Sarcopenia Diagnosis and Treatment. J Am Med Dir Assoc. 2020; 21: 300-307

2-9

演題	コ～ロナ時にできるの？
副題	～会えない！出れない！でも楽しみたい！！～

食事
コロナ禍

法人名	社会福祉法人 湘南愛心会
施設名	特別養護老人ホーム 逗子杜の郷

発表者名 (職種)	相澤 知恵子 介護職員
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	逗子市沼間 1-23-1
TEL	046-870-6800
FAX	046-870-6805
メールアドレス	morinosato-kaigo@tokushukai.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	2014年5月に逗子市内に開設致しました。JR横須賀線東逗子駅より徒歩7分の緑の杜に囲まれた立地に位置し「地域に必要とされ愛される施設づくり」を目指して、ご入居者様に寄りそう介護を提供する施設運営をしています。
---------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PRポイント

職員、ご入居者様と「コロナとどう共存していくのか?!」制限ばかりのマイナス面だけではなく「今できることをやろう!そしてみんな笑顔で過ごそう」をキャッチコピーにしてコロナ禍をつらくもあり…でも楽しみを持って乗り越えた結果を報告する。

取り組んだ課題

新型コロナウイルス対策といった中で突然、生活の変化が必要になってしまった。それに伴い面会・外出できないなどの制限により、楽しみが大幅に減少してしまっただけでなく、介護職員の中で「コロナ前みたく共に楽しみたい」といった思いが強くなった。多職種協議を繰り返し「今できることをやろう!そしてみんな笑顔で過ごそう!」をキャッチコピーとした。そんな思いの中から「家族に逢いたい!」「食事や行事など一緒に楽しみたい!」といった2つのコンセプトでアプローチを開始した。ここでは「食事や行事など共に楽しみたい!」を目的とした内容の結果を報告する。

具体的な取り組み

- ・食事について
どうしたら楽しめるのか??
 - ・決まった料理をセレクトするのではなく、共に調理方法や材料を考え各家庭でどのように作ったのかを思い出しながら料理をする。
 - ・五感を刺激できるようにライブキッチンにて調理を行った。
 - ・みんなが同じものを食べられるように食事形態ごとに調理方法や提供方法を工夫した。
- ・行事について
今までの実施場所や規模では行えなくなり、どうようにしたら行事継続できるのか?
 - ・行事の内容に合わせた計画を改良し実施
例) フロア毎に特定の場所での行事
各フロアに出向く形の出張型の行事
各フロアで同時開催する行事

活動の成果と評価

- ・共に楽しみ笑顔で過ごすことが多くなった。
- ・ご利用者様にとって今までより距離感近くなったことで様々な反応があった。
- ・職員は、自ら実施するといった主体性が生まれそれが自信に繋がり、次はどうやったら楽しんでいただけるのか?を日々の生活の中でも考案することができるようになった。

今後の課題

- ・頻度と費用対効果
- ・人員の確保
- ・開催、実施方法検討

2-10

演題	ビアガーデン常盤台
副題	～コロナ禍におけるイベント～

施設行事
お国料理

法人名	社会福祉法人 育明会
施設名	レジデンシャル常盤台

発表者名 (職種)	由井 崇之 介護職員
共同発表者	石塚 翔太
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市保土ヶ谷区常盤台 74-7
TEL	045-348-8001
FAX	045-348-8002
メールアドレス	info-tokiwadai@ikumeikai.net
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	平成 23 年 4 月開設、令和 3 年 4 月に増設し新棟併せ本入居 160 床ショートステイ 20 床のユニット型特養です。開設当初より「リスペクトケア」を合言葉に、最期まで「その人がその人らしく」過ごして頂ける様、寄り添ったケアに取り組んでいます。
---------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

月に 1 回の委員会及び臨時の委員会を行い、コロナ禍で密をさけて施設内でご利用者様の生活の楽しみや四季を添えられるように時期ごとのイベントを他職種連携しながら企画と開催をしている。

取り組んだ課題

- ・ コロナの流行から早 3 年となる。規模を縮小して開催した昨年に引き続き、感染の状況を確認しながら、今年度はどのように開催できるかを考えた。また、昨年度から新棟も会場として使用が出来るようになり、既存棟と新棟をどのように使用するか、外国籍の方も一緒に楽しめるにはどうしたら良いかを課題とした。

具体的な取り組み

- ・ 会場の選定、1 番街マルシェ、5 番街ネオマルシェを使用しご利用者様を振り分ける。
- ・ マルシェには屋台を設営準備し、ネオマルシェはテーブルを設置し食席として配置する。
- ・ メニューの選定：お国料理を屋台に出店する。日本(明石焼き)ベトナム(フォー)ラオス(コウピア)イタリア(ティラミス)他通年メニューとして、じゃがバター、枝豆、乾き物、コロケ、ソフトドリンク、ビール、ポップコーン、ソフトクリーム
- ・ 後半には盆踊り、花火大会を開催する。花火に関しては、コロナの影響で出来なかったが 3 年ぶりの再開となる。
準備:ポスター、ご利用者様への周知、屋台メニューごと各担当を決めて準備をする。お国料理は前日、当日に事前に下ごしらえし、当日はマルシェキッチンと 8 番街を使用し調理準備を行う。
盆踊り、花火:事前に自治会の方から踊りの指導を頂く。花火師は新入職員を中心に事前に声を掛け当日の花火を担って頂く。

活動の成果と評価

- ・ 事前の準備など、大きな弊害もなく順調に開催することができた。

- ・ ネオマルシェの方を屋台にお連れする距離が遠かった。当日は雨の影響もあり屋内の通路からの移動になった為、晴天であれば、駐車場を通ることもできたので、次年度以降は今回のように臨機応変な対応が必要。
- ・ お国料理はとて評判がよく、ご利用者様、職員からも反応が良かった。それぞれの屋台による、振り分け役割分担が滞りなく実施が出来ていた。
- ・ 3 番街でのコロナ陽性者により、参加を見送り番街にお持ちする対応があった。コロナ禍においては、蔓延防止の為にも統括施設長の指示のもと、安全に配慮されながら慎重にイベントが開催されていた。

今後の課題

- ・ 感染症の流行に合わせて、無理のない開催が今後とも求められる。
- ・ お国料理の評判はとて良かった。自分の国の料理もと声も聞かれている。ビアガーデンにとらわれず、外国籍の方をリスペクトしお国を知る機会を設けられたらいい。
- ・ 通年イベントであるが、上手く引継ぎが出来ていないことが年間を通じての課題。新しく行事委員となった方への指導や引継ぎは方法は今後の課題とする。

2-11

演題	多職種連携による歩行機能の改善
副題	～もう一度自分の足で歩く～

機能訓練
生活リハビリ

法人名	社会福祉法人 昴
施設名	ハートフルガーデン川和

発表者名 (職種)	吉田 尊子 看護師等
共同発表者	石田 千春
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市都筑区川和町 660 番
TEL	045-930-3888
FAX	045-930-3887
メールアドレス	kawawa.sv@subaru-fukushi.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	当施設は本入所 86 名、短期入所 4 名の 90 名のユニット型特別養護老人ホームです。 2021 年 5 月より本入所者さまを対象に個別機能訓練を開始しています。
---------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

特別養護老人ホーム入所中という生活環境でもかわり方次第で ADL の向上も目指せる。多職種の連携外部の専門職と連携することで新しい取り組みのきっかけになればと思う。

取り組んだ課題

退院後の歩行の低下に対して多職種で関わり歩行機能改善に向けてプランを実施したがそれだけでは ADL の改善は難しかった。家族カンファレンス行い医療訪問マッサージを導入したことで施設という環境でも歩行機能の改善した。

具体的な取り組み

対象者 A 様 女性 92 歳 要介護度 4
現病歴 アルツハイマー型認知症
2016 年 9 月 12 日入所
ADL は短距離歩行可で食事は自己摂取ができ趣味活動でエレクトーン演奏が行える方。
2021 年 11 月 9 日肺塞栓症、深部静脈血栓症で入院。同年 11 月 25 日退院。ADL の低下があり移動は車いす、全介助、支えあれば立位可、食事は半介助になり日中は傾眠傾向強くある状態だった。
入院前の取り組み
個物機能訓練プログラム
・ 座位にて足踏み 10 回×3 セット
・ 浴室まで歩行で移動する
・ エレクトーン演奏を行なう
退院後の取り組み
・ 口腔体操
・ トイレ移乗時手すりに捕まり立位保持 5 秒
・ 傾眠傾向あり声掛けを多くする
・ 配席を工夫し他利用者と関わりを多く持てるようにする。
・ 状態観察を行ない精神科薬の減量を行なう。
これらの取り組みと現状報告の為ご家族カンファレンスを行った。ご家族さまからは「立てなくなってトイレにいけるか心配です」とお話あり立位強化の為医療訪問マッサージ導入。
2021 年 12 月 22 日より週 3 回 2 週間実施

内容・座位にてもも上げ運動 10 回
・ 蹴り出し運動、つま先上げ運動各 10 回
・ 立位後方軽介助+手すり保持にて 10 回
上記の運動実施し 2022 年 1 月より下肢の浮腫も軽減し、つかまり立ちも安定出来るレベルになり施術内容変更になる。
内容 ・ 立ち座り 10 回
・ 立位足踏み 50 歩 (膝屈曲 90 度まで)
・ 立位片足立ち 60 秒
プログラムが変更になったところより短距離歩行が出来るようになり入院前の個別機能訓練が実施できるまでに回復した。

活動の成果と評価

退院後早い段階で ADL と内服を評価し家族カンファレンス行い訪問マッサージ導入したことで短期間での歩行回復につながった又多職種で連携し情報共有行なったことで良い結果につながった。

今後の課題

個別機能訓練でも訪問マッサージと連携し簡単な運動を導入することで ADL の改善につなげていきたい。今後は訪問マッサージとも連携し個別機能訓練のレベルアップを目指していく。

参考資料など

参考文献 デイサービス機能訓練指導員の実践的教科書改訂 4 藤田健次 2018 年発行日総研

2-12

演題	コロナ禍での生活の満足度について
副題	～効果的な支援方法とは？～

法人名	社会福祉法人 神奈川県社会福祉事業団
施設名	横須賀養護老人ホーム

発表者名 (職種)	勝見 康平 介護職員
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横須賀市野比5-5-6
TEL	046-839-2738
FAX	046-839-2739
メールアドレス	yokosuka-yogo@kanagawa-swc.com
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	神奈川県下で唯一の視覚障がいのある方を対象とした養護老人ホームです。また外部サービス利用型特定施設として、介護が必要な状態になった場合も、介護保険サービスを利用して、住み慣れた施設生活を送れるように支援しています。
---------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

コロナ禍の前は外出や外泊等楽しまれていたご利用者がたくさんいましたが、現在はコロナの影響で高齢者施設ということもあり面会や外出制限、ホームの行事等の中止・縮小等の中で「いつになったら自由な外出が出来るの?」と話すご利用者を見て、職員として何か出来る事はないか考えるようになりました。ご利用者はこの現状で何を求めているのかを把握したうえで、ご利用者の満足度を上げるための支援を考えていく。

取り組んだ課題

コロナ禍の影響によるご利用者の生活の質や満足度は低くなっていると考え、どうすれば生活の満足度を上げる事が出来るのか。ご利用者が求めている事を明確にして実践に移すことで生活の満足度はどのように変化するかについて取り組みました。

具体的な取り組み

ご利用者に研究の趣旨や内容の説明を行い、協力していただけたご利用者にインタビュー調査を実施しました。インタビューでは、コロナ前後での「満足度」や「生活状況」、「今やりたい事」等の質問を行い、その中で「外出がしたい」という意見が多くありましたが、コロナの情勢からまずは施設内で出来る事を考えるため、他の意見より「気分転換がしたい」「楽しみがほしい」「人と交流したい」という意見もありました。具体的な内容伺っていくと「ゲームやクイズがしたい。」という意見が出てきたため「レクリエーション」を取り上げ、希望のあったご利用者に絞って、グループ分けし全4回でレクリエーションを実施しました。また、「レクリエーション」の実施前後に満足度と生きがい意識尺度を使用した聞き取りを行い効果測定を行いました。「レクリエーション」実践後に、コロナの情勢が落ち着いてきたため、最も意見が多かった「外出」についても実施しました。

活動の成果と評価

「レクリエーション」や「外出」のいずれも実施前よりも実施後の方が満足度や生きがい意識尺度の数値

を上げる事が出来ましたが、それ以外にも「職員」「心身機能」という付随した要素も関連して生活の満足度を上げる事が出来た事が分かりました。限られた時間の中でも、ご利用者も「楽しかった。」と喜ばれており、今回の実践について大きな効果があったと言えました。

今後の課題

「レクリエーション」や「外出」について短い時間での実践でしたが、今後も継続的に行った場合にはどう変化するのか、レクや外出以外にも生活の満足度を上げる事が出来る支援方法があるのではないかも考えます(例えば、フロア行事等の企画や運営について、ご利用者と共同で実施していく等の役割のある生活を支援していく)。今回実証した内容も踏まえ、ご利用者の生活の満足度を上げる事が出来る一番の支援方法について、今後も模索し実践していきたいと考えています。

参考資料など

- 「生きがい意識尺度の信頼性と妥当性の検討」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jph/59/7/59_433/_article/-char/ja/
- 今回使用した「生きがい意識尺度」の様式
https://note.com/pupu_ssc/n/n587ef5c96fd5

2-13

演題	特養からの卒業
副題	～私たち入所施設職員にできること～

在宅生活復帰
排泄支援加算

法人名	社会福祉法人 道志会
施設名	道志会老人ホーム

発表者名 (職種)	山崎 進太郎 介護職員
共同発表者	川村 弘貴
共同発表者	永井 優
共同発表者	木村 彩加
共同発表者	菊地 舞子

都道府県	神奈川県
住所	綾瀬市早川城山 2-11-3
TEL	0467-76-3399
FAX	0467-70-4770
メールアドレス	dsknh3399@gmail.com
URL	http://www.doushikai.or.jp/doushikai-home/

今回の発表施設 またはサービスの 概要	社会福祉法人道志会老人ホーム 施設理念 「福祉は愛」 入居者定員 本入所 90 名ショートステイ 10 名 3フロアで軽度・重度・認知症で分けられており、それぞれの専門的知識や技術の習得と専門性に特化するために分けられております。
---------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

研究の目的、PR ポイント

ご利用者自身の自宅へ帰れることへの希望や、好きなことをして過ごしたいとの思いがあり卒業となった。最後の受け皿・終の棲家と言われている特養でも退所し自宅へ帰ることや自由があることを知ってもらうため、このテーマとした。

取り組んだ課題

本人が家に帰ることを望んでいた。職員はその実現を課題とし、施設で可能なリハビリや生活環境の整備を検討し実践した。

具体的な取り組み

- 自由のマネジメント
自由に過ごすためにご利用者本人とご家族と2つの約束をした。内容として、腎不全で体調が悪化しないよう、体調管理をするため療養食(減塩)、おやつなどの食事制限を行うこと、椎間板ヘルニアがあるため、歩行の際は無理をしない約束をご利用者本人とご家族と定め、それ以外の制限は設けなかった。
- ご利用者家族との信頼関係構築
御家族はご利用者本人の事を想い、対応が難しい要望も多くあった。そのたび臨時カンファレンス開催し嘱託医、職員からの報告を行って、ご家族と密にコミュニケーションをとった。コミュニケーションを取っていく中でご家族の姿勢が軟化し信頼関係が築けた。
- 自己リハビリ
毎日、本人自らシルバーカーや手すりを使用した歩行訓練を実施していた。ご本人がお休みしているときは、職員から体調確認の声かけを行っていた。
- 卒業を見越してのリハビリ
ご自宅には12段の階段があるため、機能訓練指導員と連携し、12段目安に非常階段を使用した昇降運動を行った。
- 生活リハビリ
衣類の管理・衣類の着脱・排泄・移動・離床などをご自身で行っていた。また、職員は最

大限介助を行うことを避け自立支援を行った。

活動の成果と評価

- 介護度が更新ごとに4→3→2と改善され卒業となった。ご家族と共に暮らすことができ、自宅復帰が叶った。
- 退所時加算を算定することができた。
- 他の卒業されたご利用者のケースから、ご家族の中には、自宅復帰を望まれないこともあることがわかった。
- 特養での卒業が実現したことで、職員のモチベーションUPに繋がった。
- 施設での自立と施設外での自立の違いが浮き彫りになった。

今後の課題

- ご利用者様とご家族様の意向をすり合わせ、必要・最適なケアを模索し実践していく。
- ご家族へ自宅復帰のみならず、外泊・外出へ踏み出せるような勇気づけをすること。
- ご利用者様が自宅復帰可能な方に関しては、生活環境をご家族様と共に考え構築していくこと。
- 地域の生活を想定したりリハビリの模索と実施をしていくこと。